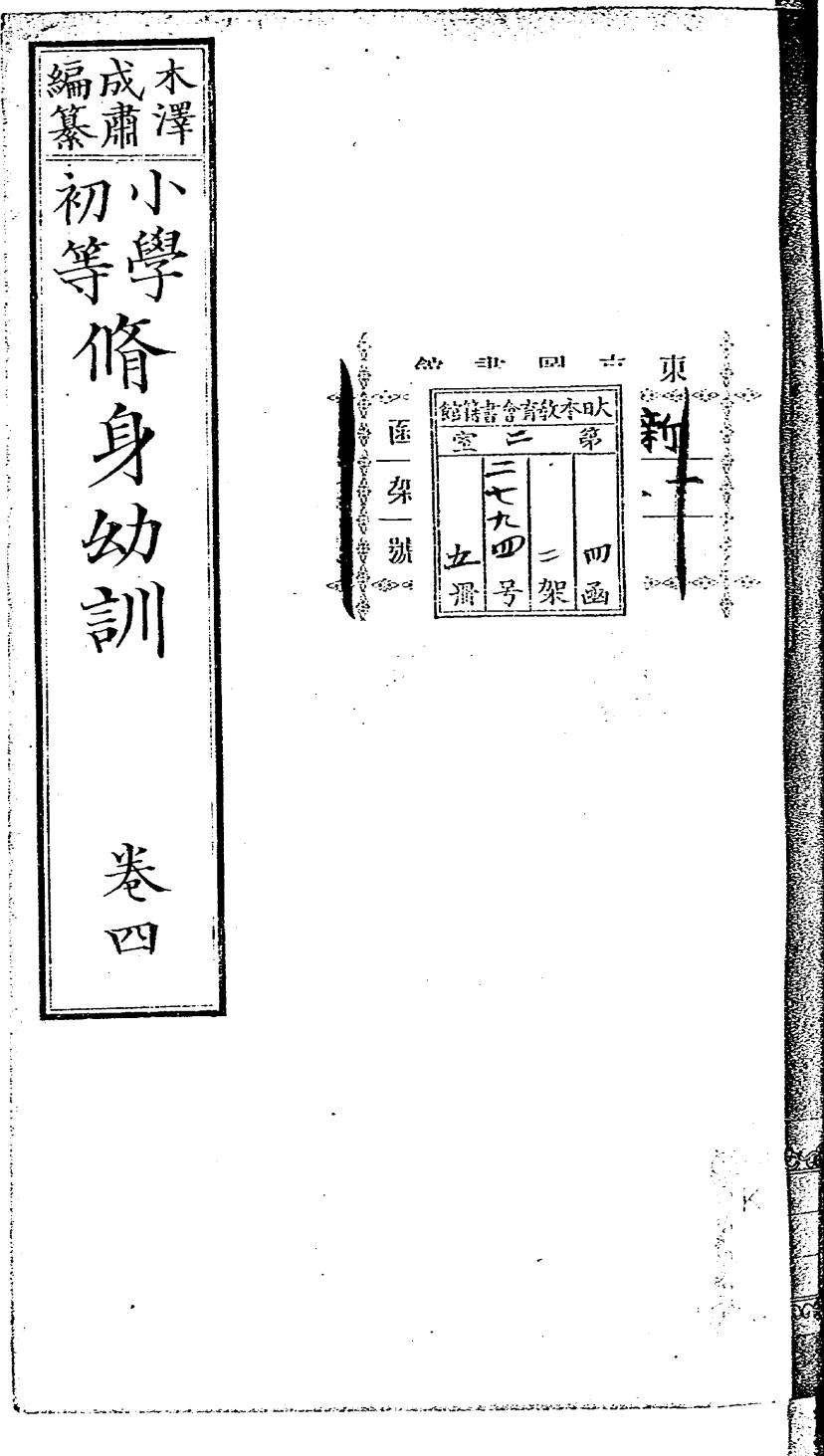


K110.1

184

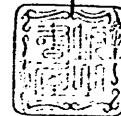


木澤成肅編纂
蒲生重章校閱

卷四

小學初等修身幼訓

明治十五年三月廿八日版權免許



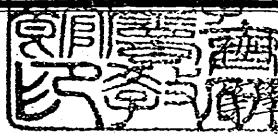
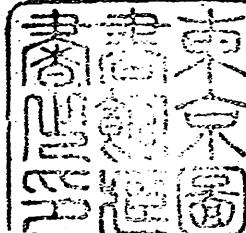
修身幼訓卷之四

木澤成肅編纂

蒲生重章校閱

第十

○家を保つ北道は、勤と儉とよあり、勤儉なきば、財耗失はざりて、克く家を保り、一、二比者も併び行ひて、一を缺くべからば、蓋一勤儉の工夫ハ、忍ふ在り、忍は耐ふ事あり、勞苦に耐へて克く勤め、私慾を制して、儉約を



小學初等修身幼訓

卷之四

一

行ふを一 貝原益軒ノ格言

○宋の范純仁、子弟戒めて曰く、人至愚も
里と雖も、人戒責むるを明かよ、聰明ふうと
雖も、己レを恕を教し昏し、爾ガ曹、但常小人戒
責むる比心を以て己レ戒責め、己レを恕を教の
心抜以て人を恕せば、賢聖の地位ニ到らざ
れおやを患へざるあり小學

○深黙よ一て測る歴からざるあかれ、深黙
ふ一て測れべうらざる者ハ、人と親み難シ。

且人ツは疑惑ア起さム、夫我レ人ハは深黙アれ
ど、人モ亦我ハ深黙ナり、此ハ如くなれど、畢
竟我ハ世間ニ事ニ暗シ。 智氏家訓

○子路ハ人ニ告ル小ニ過ア教シを以テ之ヲれ
ど喜ぶ、禹ハ善言ヲ聞く時ニ拜シ、大舜ハ六
きニ大ニある事アリ、善戒人ト同ドくヒ、己ハ
戒舍ス、人モ從フ、人ハ取テ、以テ善ヲ爲ハに
を樂ム。 孟子

○明の蔡虛齋曰く、人の道ヲ立フ、仁ト義

と曰ふ、蓋一凡、一切比人よ接し、一切の事小應ぞ、皆當さよ仁哉以て主と爲をべし、仁の行ひ去らざる小至てし、便義哉以て之を裁を、故に窮まらず富德錄

○身の長ぞる所、上知らじと雖も、以て君尔恃らぞ、身比短あれ所、上知らずと雖も、以て賞哉取らず、長短飾らぞ、情哉以て自ら竭れ、是の如くあれば、直士と云ひ荀子

○人倫要鑑小曰く、善を行ふの人も、春園の

草の如ト、其長ぞる哉見されども、日小増を所あり、惡哉行ふ比人も、刀を磨すれの石比如ト、其損をる哉見ざき也、日よ虧くる所あり穀詒彙

○君子の學小於るや、藏焉修焉息焉游焉夫然り、故小其學よ安んじて、其師を親み、其友拔樂みて、其道哉信じ、是哉以て師輔哉離る望いへども、反せざるなり禮記

○明の孫子度曰く、天下極て詐り、極て險ふ

袁の人を、吾至誠を以て之哉待てば、其險詐
を將さ小用ゐる所からんとす、而して亦
相感ドて以て誠ならん、若一機智を以て之
哉禦グぞ、愈其潰決を甚しくをれ也

張揚園集

○曾子曰く、父母之哉生ず、子敢て殺さば、父
母之哉置く、子敢て廢せば、父母之哉全ふす、
子敢て闕かば、故小舟にて游ゲぞ、道にて徑
せど、能支體哉全くにて、以て宗廟を守る孝
と謂也一呂氏春秋

○木、繩を受くれど直く、金、礪アリを就けど利ト、
君子博學よーて、日よ己哉三省をきば、知明
かにて、行ひ過舉あー、故よ高きよ登らざ
きぞ、天の高を知らば、先王比遺言哉聞かざ
れば、學問比大あはを知らず荀子

○君子と遊ぶ苾乎とーて、蘭芷の室ふ入る
が如ト、久しく志て聞かざるも、則之と化を
矣也、小人と遊ぶハ貸乎とーて、鮑魚の次よ
入るぐ如ト、久しく志て聞うざるは、則之と

化するなり 大戴禮

○愛^ハ立^スるへ親より始^ルは民よ睦を教^ス也、敬^ハ立^スるは長より始^ルは民^ノ順^ハ教^ス也、教^スるに慈^ハ睦^スを以^テて一^トも民親あれを貴^ハ教^スふ、敬長^ハ以^テて一^トも民命を用^ヒ哉^ハ貴^フ、孝^ハ以^テて親^ノ事へ順^ハ以^テて命^ノ聽^ク、諸^ノ天下^ノ小錯^ハ行^ハれざ^ス所^ニ—^ト 禮記

○恕^トて之^ハ行^ハふ^ニの徳の則^也、忠^ニの徳の正^也、信^ニの徳比固^也、卑讓^ニの徳の基^也、徳^ノ非^ざ

れど勤^ハ如^クい^ナい^ト、勤^ハあらざ^キど、何^ハ以^テ人^ノを求^メん、能^ハ勤^ムれど繼^ハ大^丈ア^マ、○今^人の病痛、只^レ一箇の傲^ハ字[、]千^罪_{左傳}百^惡皆^ハ傲^ニ生^ジ、謙抑^モ乃^チ是^ニ對^シ症^ノ藥^アり、謙抑^ハ但^レ外貌^ノ恭敬のみならず、其^ハ自^カから視^るお^望歎然[、]已^ハ不足^ニ處^{アリ}、不^是の處^何る^ニ残^見て、纔^ニ能^ク己^ハ虚^ク一^ト益^{を受}く、○賦^ヲ輸^一役^ニ應^ド、力^ハ勉^め事^ニ從^フ義[、]王陽明ノ格言の當^サに然^る遍^た所[、]を一人^ノ先^{だつ}能^え

ばれも、必ず時に後るべからば、特よ分ふ安んじ、誼茂守ふれをあらず、亦罪に遠ざかる所なり。張楊園集

○拱把比桐梓、人苟も之を生ぜむと欲をる。すまは、皆之茂養ふ所以の者を知れ、身は至りて、之を養ふ所以比者茂知らば、豈身茂愛をふこと、桐梓よ若かざらむや、思はざるの甚一きなり。孟子

○宋の張無垢曰く、明を内よ用ゐる者も、己

が過を見ふ、明茂外よ用ゐる者も、人の過を見ふ、己が過を見る者は、天下皆己よ勝るを視る人の過茂見ふ者も、天下皆己よ如かざるを視る、此智愚の分も、所なり。自警編

○高上尊貴以て人よ驕らば、聰明聖智以て人茂窮せば、齊給速通争て人よ先だば、剛毅勇敢以て人を傷はず、知らざきば問ひ、能せざれど學ぶ、能そと雖も必讓る、然る後徳となし。荀子

○人レ不隨ハシマひて毀譽ヒシヨウを爲スル者ハヤシタ、昔人カツヒン諸ハナシを矮人タチヒトの戲場エイジョウ找觀スルよ譬言ハシメフ、其真ハセニ不見ハシマる所ハシマなきを以テてなり、凡人ハナシヒト找知スル事ハシマあと審ハシマかハシマなるよ非人ハシマヒトべ、人ハシマよ隨ハシマひ輕ハシマ一ハシマく毀譽ヒシヨウを爲スル者ハヤシタ、盈ハシマうらば、然ハシマらざきハシマど、過ハシマとハシマぎは者ハヤシタ鮮ハシマ—ハシマ慎思錄

○君子ハシマ敬ハシマせざる事ハシマなし、敬ハシマの身ハシマを敬ハシマれるを大ハシマと爲スルに、身ハシマの親ハシマの枝ハシマあり、敢ハシマて敬ハシマせざらんや、其ハシマ身ハシマを敬ハシマせざきハシマり、是ハシマ其ハシマ親ハシマ找傷スルる、是ハシマ本ハシマ找傷スル也ハシマ、其ハシマ本ハシマ找傷スル禮ハシマ記ハシマ

第十一

○人ハシマの世ハシマ不ハシマ在ハシマるや、必ハシマし愛憎ハシマ私ハシマあり、是ハシマを以テて褒譽實ハシマよ過ハシマる者ハシマあハシマ、猜忌冤ハシマ找爲スル者ハシマあり、故ハシマよ人ハシマ比ハシマ毀譽ヒシヨウ、理ハシマ不ハシマ當ハシマらざる者ハシマ多ハシマ、毀譽ヒシヨウより信ハシマを盈ハシマからず、古人カツヒン曰ハシマく、公論ハシマ百年不ハシマ一ハシマて後定ハシマれと、豈然ハシマらぞハシマやハシマ慎思錄

○君ハシマ小事ハシマ不ハシマに進ハシマむ找難ハシマくハシマ、退ハシマくハシマを易ハシマくハシマすれど、位ハシマよ次序ハシマあハシマて亂ハシマれば、進ハシマむ找易ハシマくハシマて、退ハシマくハシマ找難ハシマくハシマをきば、亂ハシマふハシマ也ハシマ、故ハシマよ君子ハシマハ

三たび揖一と進み、一とあび辭一と退く、以て亂ふ遠ざかれ也。禮記。

○德盛んな者も、その心和平、人皆交るべきを見る、徳薄き者は、其心刻傲、人皆鄙む。臣子見る者、人を觀る者、其許可する所多き哉。看きど、其徳の厚哉知る、其許可する所の少きを看れば、其徳孔薄哉知る。人生必讀書。

○貴へ富を期せば、而して富至る、富も梁肉哉期せば、而して梁肉至る、梁肉の驕奢を期

さば、而して驕奢至る、驕奢の死亡を期せず、而して死亡至る、累世以前、此より坐をる者多

一 戰國策

○明の張念芝曰く、敬以て親小事ふきべ親安し、敬以て長事ふきべ長安し、敬以て下臣御をれど左右婢妾の人安し、敬せざる所なけきど、安んぜばる所あり、故ふ曰く、敬を

ぎ教誨からじと 楊園集

○死友比過ち残影をひ、此より是第一の不仁

一 戰國策

卷四

八

なり、生て之小告ぐるや、其能く改むれを望む、彼之哉聞よ及ぶや、尚能く自から白を薙し、死一々之を彰そん、何の爲ぞや、實過あまと雖ども、吾爲め小之を掩もん 呻吟語

○毀譽榮辱の来る、獨以て其心を動かさず、私計み乍らば、且之を資り、以て切磋砥礪の地と爲毛、故小君子も入ると一て自得せばるべし、若一譽を聞て喜び、毀を見て戚焉、其何成以て君子と爲さん 王陽明人格言

○士小妒友あきば、賢交親志ば、君よ妒臣あれど、賢人至らば、公を蔽ふ者、之を昧といふ、良哉隠に者、之を妒といふ、妒昧哉奉ざる者、之を交謗といふ、交謗の人と、妒昧比臣とへ國社歲孽也 荀子

○凡遭ふ事あろば、患難、變故、屈辱、讒謗、拂逆の事も、皆天の吾づ才を老一むるゆゑん、砥礪切磋比地よあらざふはなし、君子當ち小之哉處をも所以を慮る薙し、徒らよ之哉免

かきんと欲をぞ不可なり 言志錄

○夫聲ハ細く一て聞ヘざれ事なし、行も隠
きて形れざる事なし、玉山より居て木潤ひ、淵、
珠哉生ドテ岸枯れぞ、善を爲一て積まざる
や、豈聞えばる事アラムや 大戴禮

○恐懼ある者ハ身哉修ムの本なり、事あ
れの前より恐懼をきぞ畏る、畏ふれば以て禍
哉免る盈一、事ありて後より恐懼すきバ悔也、
悔ゆきじ以て過を寡くをベ一、夫れ智者ハ

畏る故小身哉保ち、愚者も畏れば、故に身を
殺ハ省心錄

○人の臣たる者、其身哉殺一て、其君小大益
あれ時も之哉なハ、況んや其身を殺ミニ至
らば一て、其君を善くするを得バ、勤勞哉厭
はぞ一て、勉めざは盈けんや 禮記

○凡智愚の他なし、書を讀ムト、書哉讀まざ
るとよ在リ、禍福も他ホ一、善を爲ミト、善哉
爲さハはやよ在リ、貧富の他ホ一、勤儉と、勤

儉からばると小在と、毀譽へ他なし、仁恕と、仁恕ならざるをよ在り呻吟語

○君能く命を制するを義也あし、臣能く命を承る誠信となし、信を以て義を戴いて之を行ふを利也あし、謀りて利失はば、以て能く社稷茂守ふべ、民の主也

左傳

○幼學の士も、先づ人品比上下を分別せん。古之茂要に、何者ク是聖賢爲を所の事、何者か是下愚爲す所ひ事、善より向ひ、惡より背ま、彼

茂去と、此を取る、此幼學當さ小先んど並き所なり

明陳忠肅ノ格言

○父母沒をといへども、將ふ善茂爲んとすきぞ、父母不令名を貽らん事茂思ふて、必果に、將よ不善茂爲んやをれば、父母且羞辱を貽らん事茂思ふて、必果さば

禮記

○余毎よ寒士の將さよ、達せんともろを見るよ、必ず一段謙光の氣あり、恂々款々とて、敢て人小先だ、ぞ、或ハ侮茂受けて答へ

ず、或も謗を聞いて辨をば、人之茂見て愛を盛
く敬を盛一 明袁坤儀ノ格言

○人茂知る者ハ智、自ら知る者ハ明、人ニ勝
川者ハ力あり、自ら勝つ者は強し、足る事を
知れ者ハ富み、強め行ふ者モ志あり、其所成
失はざる者モ久一小を見不殘明といひ柔
を守ふを強と云ふ老子

○清の魏天民子を教へ、師傅茂敬重し、飲食
必ず親から視る、嘗て曰く、人其子孫の賢か

らん大才を冀ひ、而して其師を敬せざれども、
猶身ホを養もんと欲して、反て其衣食茂損ぞ
ふが如一 今世説

○少年輩、妄り小己ホ才智を許して、大なり
と爲毛者あり、此醉客の自から信ドて、十分
嚴肅ありと爲毛ホ如一甚一に不幸なり、少
年輩、活氣茂尚とび、顧慮なく事をなし、反て
老成の練熟小勝ホと思ふ者あり、是既小
事の半を敗ける者あり智氏家訓

○衆口も禍福の門也、是を以て、君子へ衆叛省にて動た、監戒シテ謀り、謀度シテ行ふ、故に濟らざる所シテなし、内謀シテ外度シテ、考省倦まば、且シテ日々考へて習へど、戒備畢シテる。國語

○女シテ容シテよりシテ心シテの勝シテきたるを善シテとすべし、心シテばシテへシテもシテなシテ女シテもシテ心シテ騒シテく、眼シテ恐シテろシテく見シテ出シテして、人シテを怒シテ、言辭シテあらシテかよ、物シテ言シテひシテがまく、口シテきシテて人シテは先シテどシテち、人シテ怨恨シテえシテ嫉シテみ、我身シテは誇シテり、人シテを謗シテ、笑シテひ、わき人シテは勝シテ

里貌シテあるし、皆女シテの道シテふ違シテえシテるなり、女シテは惟和シテらだ順シテひシテて、貞心シテは情シテけ深シテく、靜シテあるをよシテりやシテん女シテ大學

○人の己シテ我愛シテをむシテを欲せシテど、必シテ先シテづ人シテを愛シテし、人シテは己シテよ從シテふを欲せシテば、必シテ先シテづ人シテよ從シテふ、人シテみ徳シテをふことシテあくシテて、人シテふ用シテふらきむあと求シテむるシテの罪シテ也、敬シテそ徳シテの格シテ也、徳シテよ恪シテ志シテをば、以シテて事シテよ臨シテみて、何事シテか濟シテらざらむシテ國語

○二人同舟往シテく所シテあり、一人性急シテなり、晝夜

程遠計り、稍、阻めじ、輒、憤懣ト、形枯瘁を爲シ、一人性緩あり、之より任ドて食を増し、寢哉甘んド、顏色日小澤フ、既ヨリテ其處小抵リ、二人同時岸より登ル、此以テ躁心者の戒と爲モ

蘆一 明劉時卿ノ格言

○君子之行ひ苟も難き哉貴ぞレ、説は苟も察そる哉貴ばズ、名ハ苟も傳るを貴べぞ、唯其當をあき貴ーと爲レ、知ニ疑哉棄るより大あれもなく、行ハ過なれより大なるハあ

く事ハ悔なれより大あれハ勿レ荀子

○人の病、好て其長談者、在り功名より長ぞ者、動もすきど輒功名ム誇里、文章に長ぞ者、は、動をされば、輒文章よ誇る、此皆其長じる所哉露をして、其長ぞる所を養ふ能もば家者あつ、唯智者言レ、故よ能く其長保ム 明王耐軒ノ格言

第十二

○女位を内に正し、男位哉外小正し、男女正

小學 刀箭圖 參考カ月六日

廿

志記も、天地の大義なり、家人に嚴君有り、父母の謂ひあり、父ハ父たり、子は子あり、兄ハ兄たり、弟ハ弟たり、夫ハ夫たり、婦ハ婦たり、而して家道正し、家を正志くして、天下定ま

新周易

○年少の子弟ハ、未ざ世事経験を、人情よ達せば、老人其言を以て、迂遠ふして、時勢不合もぞとし、父祖蔑視する者あり、假令其人才能有ても、未ざ世事経験歴せざきば、老人

の迂遠あるふを劣きり、故よ年長け、事を經ふよ及びて、始めて其言比理あれ、悟る盈

家道訓

○墨子は素絲染る者を見て、歎ドて曰く、蒼より深むきの蒼、黄より染れど黄入る所以の者變ぞれど、其色變じ、五入して以て五色と爲る、故よ深へ、慎志まさか私盈からばる也

呂氏春秋

○家の主たる者ハ、其身を修め、其家を興そ
茂以て志となし、先づ父祖より傳そきる財

家道訓

參照力川卷四

産を失もざるを以て孝と爲すべし、天災よりして財産失ふも、人力比能く及ぶ所非也、己不徳よりて之を失ひ、或へ之哉減耗を軼も、大なる不孝と謂ふ歟。——家道訓

○凡人の子弟とあれば、須からく是常よ聲を低く一氣放下し、語言詳緩よを歎し、高言誼閑浮言戯笑をべからば、父兄長上教督を了所阿きべ、但當小首哉たれと聽受をべし、妄里よ自ら議論を歎うらば。童蒙須知

○小人を當さふ之哉始よ遠く歎し、一飲一食も之と交接を歎からば、に泛然相識らざるが如くなれば、怨えなく尤めなし、若しその才能を愛し、或へ特比勢力哉借り、一とび與よ親密あきぞ、後來必ず大讐哉まさん。願體集

○衣食住の三比者も、我づ分より輕くをべし、我づ適當せりと思ふに、已不分より過ぎたりなり、只親哉養ふも、本み報ぞる比道あきど、我づ分哉忘きて、財哉惜む歎からば、又人

を救助するに至り、分より隨ひ力竭盡を極し、是人哉恤み人ふ交るの道あり

家道訓

○必ず容るこ有きば、徳乃大なり、必ず忍ぶべとあれど、事乃濟る、一毫の心より拂ふことを可きべ、即ち勃然とて怒り、一事比心より違ふ心をあれば、即ち憤然とて發を、是涵養の力也。薄福之人なり、故不曰く、人比詐里哉覺るも、言小形もはゞれば、限り猶記の味あり

非庵日纂

○子を愛する者へ子を慈し、生哉重んじる者へ身より慈す、功を貴ぶ者へ事より慈す、慈母の弱子ふ於るや、務其福哉致に時へ、事其禍を除く、事其禍哉除けじ、思慮熟す、思慮熟じれば、事理哉得、事理を得きば、必功を成す

韓非子

○氣哉尚び、勝哉好む、人の常情と雖ども、小利を争ひて、大義哉忘き、虛氣哉尚びて、實禍哉釀を極からば、世人或ハ尺地を争ひて、數千貫哉費し、或も一言比忿み其身哉忘き、

以て其親小及不_レ者あり、若一能く含容忍耐、人の和解_ス聽かず、財を省_ス力_ス省き、心身安寧_スらん。願體集

○名と身_ス孰う親志_ス、身と貨_ス孰か多なる、得_ス亡と孰か病_スき、甚_タ愛志_ス也_レ、必大_ス費や_ス、多く藏_スされば、必厚く亡ふ、足_ス知れど、殆_タからず、以て長久な_ス也_レ。老子

○德も本也、財ハ末也、本を外にし、末_ス内_スをきば、民戦爭は一め、奪_スことを施_ス、是故小

財聚_スり民散_ス、財散_スれば民聚_スる、是故よ言悖_スつて出_ス者ハ、亦悖_スて入_ス、貨悖_スて入_ス者も、亦悖_ス出_ス。大學

○凡_タ婢僕_スを待_スを_ス、必_ス端嚴_ス之と嬉笑_スる哉得_スる勿_ス、器皿_スを執_ス、必_ス端嚴_ス惟失_スあらむを恐_スきよ、凡_タ危険_スへ近く處_スからば、凡_タ道路長者_スよ遇_ス、必_ス正立_スて手_ス拱_ス、疾く趨_スりて揖_スも、凡_タ夜卧_ス必_ス枕_ス用_ス、寢衣_ス以て首_ス覆_ス勿_ス。童蒙須知

○善を見て、修然必以て自ら存する也。不善哉見て、愀然必以て自ら省むる也。善身より在れど、介然必以て自ら好とする也。不善身より在きび、蓄然必以て自ら惡む也。故より我を非常にて當れる者へ吾師也。我哉是と一して當る者へ吾友也。荀子

○芝蘭深林より生じ、人無きが以て芳じ一からばるへあらず、君子道を修め德を立つ、窮困の爲めふにて節哉改免し財なむ者之哉

貧と云ふ道哉學びて行ふ能はざる者、之を病む云ふ孔子家語

○貝原益軒曰く、他人の家より赴きて詰せじ、須らく朝饔晚飧此時を避く。主人事あるの時を妨ぐにからばり、人比爲め小厭いする者へ、客たれど禮より非ぞ、凡そ客ひる者は、故呵輕み非きじ、緩坐して時を費し、主人哉志す、倦怠を一むべからば慎思錄

○君子深く之より造るに道を以てモ、其自ら

之を得んが故欲を起也、自ら之を得れど、之より居る事安し、之小居るより安けりば、之を得ること深し、之を資すことを深あれど、之を左右より取りて、其原小逢ふ、故よ君子へ其、自ら之を得んが故欲する也。孟子

○人比妻たるを耻も、嫉妒の心努々起を厭からば、夫も一不義過あらば、わざ色哉和らげ、聲哉柔うにてて諫む歎く、諫め聽うば、そ怒らば、先暫く止めて、後ふ夫の心和らだ

たる時、復諫む歎く、必氣色を暴く、聲をいらゝずて、夫に逆ひ叛くよりあかき女大學

○多言あれ乍らかき、多言なれば敗多し、多事あるなれど、多事なれど患多し、安樂必戒志め、悔ふ所哉行ふあかき、何ぞ傷らんと謂ふなかき、其禍將小長せんとし、何ぞ害あらんと謂ふ勿き、其禍將よ大ならむとし孔子家語

○發一て然る後禁じきり、扞格一て勝えど、時過だて然りて後學歎く、勤苦一て成り難

一、雜施一々孫せざれり、壞亂一々修めらば、
獨學て友なけきじ、孤陋一々て聞く事寡し、
燕朋も其師不逆ひ、燕辟も其學伐廢し、此六
つは者へ教の由て廢をふ所なり 禮記

小學修身幼訓卷の四終

明治十五年三月廿八日版權免許
同十五年五月 出版

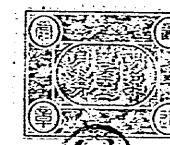
定價八錢

東京府士族

木澤成肅

下谷區下谷西町壹番地

編纂人 同士族
出版人 同士族
辻謙之介



出版人

同

平氏

本鄉區本郷元町壹丁目六番地

日本橋區呉服町十二番地

同

平氏

北島茂兵衛



發兌人

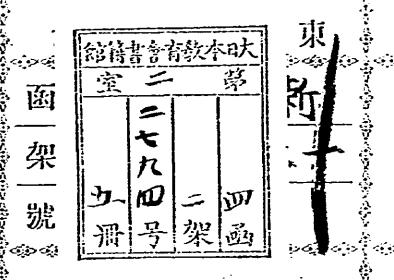
同區通壹丁目

阪上半七

木澤
成肅
編纂

小學初等修身幼訓

卷五



函一架一號

K110.1
47
5